

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12062

研究課題名(和文) 妻を亡くした中年期男性家族の強みに関する研究

研究課題名(英文) A study on strengths of middle-aged men who lost their wives and their families

研究代表者

坂口 美和(荒木美和)(Sakaguchi, Miwa)

三重大学・医学系研究科・准教授

研究者番号：90340348

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、病気で妻を亡くした中年期男性と研究者が協働し、死別前から現在に至るまでの家族の歴史に焦点を当てた体験の語りの中で家族の強みを探索し、家族の強みの全体像を明らかにすることであった。研究協力者は6名であり、妻と死別をして1年～4年経っていた。妻の療養に伴い、在宅緩和ケアチームの協力を得ている人もいた。語りをKJ法の手法に基づき、「強みの」解釈を行った。家族の強みは多岐にわたる。「家族を守ることができた」「在宅で見る困難を超えてきた」「最善を尽くせた」「体験を無駄にしない」「亡き妻も含めた家族の新たなつながりをもつ」「仕事の都合を付けられる」「人生を意識して生きる」要素が見出せた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

妻を亡くした中年期男性は、精神的・身体的健康障害リスクが大きい。大きな喪失感を味わうと、悲しみだけにとられて自分の力に気づけなかったり、過小評価したり、家族それぞれがもつ可能性に気づかないことが多いと言われている。しかし、全ての家族には喜びを分かち合い、苦悩を乗り越え対処してきた強みがある。中年期男性家族の強みの全体像を明らかにすることで、一見脆弱に見える家族を彼らの強みの視点から少しでも理解を深めることができる。そして、死別の様々な課題に対処する力を支えるケアの示唆を得ることができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was for researchers to collaborate with middle-aged men who lost their wives due to illness to explore the strengths of a family in a story of experiences that focuses on the history of the family from pre-mortem to the present, and it was to reveal an overview of the strengths of the family. Six people cooperated in the study, and had been bereaved from their wives for one to four years. Some have been assisted by a home-based palliative care team to treat their wives.

As a result of interpreting "narratives" based on the KJ method, the family's strengths were widespread.

And the following elements were found: "I was able to protect my family", "I have overcome the difficulties of nursing at home", "I did my best", "I will not waste this experience", "I have new connections with my family, including my dead wife", "I was able to balance nursing and work", "I will live my life consciously".

研究分野：終末期ケア、緩和ケア、遺族ケア

キーワード：中年期男性 配偶者の死 家族 強み

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

妻を亡くした日本の中年期男性は、配偶者死別総数のわずか3%であり(平成22年国勢調査)配偶者の死という大きな括りの中に埋もれ、注目されにくい人々である。しかし、50歳時点の男性の配偶関係別平均余命は、有配偶者に比べ死別者は、約3.2歳短縮していたり(石川,1999)、平成22年における配偶関係別の自殺死亡率状況では、明らかに男性の方が死別後の自殺率が高い(平成24年版自殺対策白書)ことが示されており、配偶者と死別後の精神的身体的健康障害リスクが非常に大きい人々である。米国文化において男性は、喪失を悲しむ機会においても強くあることを教えられ、沈黙を続け、活動に熱中して不安を覆い隠し(Staudacher,1991)、悲嘆を感情的ではなく身体症状として表現し、悲嘆を分かち合うことは自分で問題を取り扱えないという告白であると捉えている(Golden,1996)。日本社会においても男性は、過労死や自殺率の急増が社会問題になり、男性という性役割に附随する価値や評価が男性個人の尊厳に大きく影響しているため、悩みを打ち明けたり、人に助けを求めて頼ることが難しい(伊藤,2003)。まして中年期は、人生の後半に至る転換点としてアイデンティティの再獲得をしていく時期である。妻を亡くした中年期男性は、死別を機に生活や仕事の仕方を内省し、妻のいない高齢期に向かう人生の生き方を見出していかなければならず、死別の悲しみに加えて何重にも価値観の揺さぶりを受け、その苦悩は計り知れない。

脆弱性際立つ彼らの遺族ケアを考えるのに、哲学者 Attig (1996) は、死別は一人一人の人間全体に影響するため、死別後の悲しむ営み (grieving) は、「世界を学び直す営み (relearning the world)」であるという概念を打ち出している。死別という破壊的な影響が生活に生じるとき、しばしば無力さを感じるが、悲しむというのは主体的に対処していると見る。そして、悲しんでいる人は話を辛抱強く聴いてくれる人を必要としているだけでなく、自分の立場を見定め、直面する試練と闘う術を見つける助けになるような積極的な聞き方をしてくれる人を必要としていると述べる。

つまり、遺族ケアは、悲しみを癒すことと、主体的に死別に対する苦しみや悲しみに対処する力を強めることが含まれる。しかし、現在は「悲しみを分かち合う」ことに主眼が置かれており、妻を亡くした中年期男性にとっては男性性を脅かされる恐れもあるため、ケアに結びつかず、十分な遺族ケアとは言えない。

対処する力を強める遺族ケアは、遺族のもつ強みを見出し引き出し支えることだと考える。坂口ら(1999a)は家族機能と緩衝効果を調べた結果から、死別は、個人だけでなく家族全体としての出来事でもあり、家族の潜在的な力が試される機会であると報告している。つまり、死別という危機のときには、家族の潜在的な力を引き出すことが重要だと考える。家族の潜在的な力とは、家族の強みのことであり、家族自身はそれに気づいていないこともある。しかし、死別のときに主体的に対処するための家族の強みとは何かは研究されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、妻を亡くした中年期男性と研究者が協働して、死別前から現在に至るまでの家族の歴史に焦点を当てた体験の語りの中で共に家族の強みを探索し、家族の強みの全体像を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

KJ法を用いた質的研究

(2) 用語の定義

家族とは

家族看護学に依拠し、家族全体をケアの一単位として捉えることから、当事者も家族の一員とし「家族」に含まれるものとして表現する。本研究において「家族」とは、当事者を含めたケアの一単位としての家族を指す。

家族の強みとは

家族看護学に依拠し、すべての家族は強み (Strengths) を内在していると捉える。強みは人の中に存在する力やエネルギーの根源であり、人生の様々な困難にあって引き出され、よい状況にさせるものである。強みは、家族の資産であり、ユーモアや柔軟性等の肯定的な特性、問題解決や意思決定等の家族が適応し対処するために役立つ知識・技術や許容能力、実践能力、また、コミュニケーション能力や対人関係能力等の何かを成し遂げるための技量が含まれる。強みは弱さと共存する。(L.Gottliebe, 2004, 2013)

協働とは

異なる主体が何らかの目標を共有し、ともに力を合わせて活動することを言う。そのため、本研究では、研究者は研究協力者の話を誠心誠意聞かせていただくという姿勢で臨み、研究協力者と研究者が共に強みの探索を行っていくことを指す。

(3) 研究協力者

病気で妻を亡くした中年期男性(40歳代、50歳代)であり、死別をしてから1年以上経過している人である。また、精神疾患で入院、通院していない人を対象にする。単独世帯であっても、家族がいると表明する人であれば研究協力者に含まれる。家族とは、血縁や戸籍に縛られることなく、研究協力者が家族と思っている人である。

(4) 研究協力者と出会う手続き

訪問看護ステーション、診療所、病院、分かちあいの会の責任者に研究の説明をし、研究協力者候補者の選定をお願いした。

(5) データ収集、データ統合方法

KJ法の取材手法を用いて行った。

(6) 真実性の確保

KJ法の基本的な手法を学ぶとともに、KJ法の研修に参加し研鑽を積む。研究過程においてスーパーバイズを受ける。

(7) 倫理的配慮

本研究は、所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

6名の研究協力者は、妻と死別をしてから1年から4年が経過していた。その間、子どもの独立や家族の同居、家族の事故や家族同様の動物の死など家族の状況は変化し、その変化に対応していた。仕事では指導的立場にあり、管理や運営に携わる人もいた。妻は入退院を繰り返していたが、妻の病状に合わせて、家族の仕事は家族や親類で助け合っていた。妻の介護が必要になれば、仕事の調整をして介護に携わり、在宅緩和ケアチームの協力を得ている人もいた。

中年期男性家族個々の強みは多岐にわたる。その中でも特に「家族を守ることができた」「在宅で見る困難を越えてきた」「最善を尽くせた」「体験を無駄にしない」「亡き妻も含めた家族の新たなつながりをもつ」「仕事の都合を付けられる」「人生を意識して生きる」が見出せた。

「家族を守ることができた」は、妻の生きる希望や妻の安楽を守るために、様々な困難に中年期男性と家族のもつ力を最大限に発揮して立ち向かい乗り越えてきた内容であった。妻を介護し妻が亡くなったことに対する家族の心身への影響に対しても、妻の尊厳を守るように対応していた。家族の日常の生活が行えるようにリーダーシップをとっていた。選択した治療や妻の世話を家族でやりきった思い、やってきたことに後悔がない思いから、「最善を尽くせた」ことが強みだと見出した。

研究協力者のうち5人は在宅で介護をしており、4人は在宅で看取りをしていた。自宅での介護にはエンリッチメントを体験していたが、苦悩も多く、「仕事の都合を付けられる」ことで、妻の受診に付き添ったり、在宅を希望する妻の望みを叶えたりできていた。仕事と妻の状況を見て、上手にバランスを取り、その時々での優先順位をつけ、仕事でも家でも協力者を得ながらものごとを進めている。そして、「在宅で見る困難を越えてきた」ことは、貴重な介護体験、看取り体験と受け止めていた。その体験から得たことをブログに書いたり、病院の改善を提案したり、ボランティア活動に活かしたり、職場の後輩に伝えたり、新しい職に結び付けたりと多方面の活動に活かし、創造するエネルギーに変え、「体験を無駄にしない」生き方をしていた。

妻が亡くなり、改めて定位家族の中での家族の体験、妻との出会い方、家族をつくってきた思い出、家族が亡くなる時の不思議な体験、妻が亡くなった後の家族のつながり方などを振り返る。その中で、家族は絶妙なタイミングで引き寄せられると感じたり、生死を超えたつながりを考えたり、互いを思いやったりと、より家族のつながりを大事にしており、「亡き妻も含めた家族の新たなつながりをもつ」ことが強みになっていた。

妻が亡くなり、家族それぞれが自分の人生を歩み続ける。中年期男性も自分の人生を再考する。自分の死ぬときの介護状況や親の今後の介護を考え、子どもの生活や自立を支援する役割を担いながら、今後、どのように生きるのかを考える。やりたいことを模索していたり、人の役に立つことをしようと行動していたりしており、改めて、今後の人生で何をしたらよいのかという考えをもち、「人生を意識して生きる」ことをしていた。

< 引用文献 >

- ・Attig Thomas(1996): How We Grieve: Relearning the World,9-71, Oxford University Press.
- ・Golden,ThomasR(1996):Swallowed by a Snake, Golden Healing Publishing,1-5,73-96.
- ・Gottlieb L.N, Carnaghan-Sherrard.K (2004) : マッギール看護モデル, 家族看護, 2(2), 71-83.
- ・Gottlieb L.N(2013) : Strengths-Based Nursing Care,105-113, Springer Publishing Company.
- ・石川晃(1999) : 配偶関係別生命表: 1995年, 人口問題研究, 55(1), 35-60.
- ・伊藤公雄(2003) : 「男らしさ」という神話、NHK人間講座. 7 - 21.
- ・坂口幸弘他(1999a): 家族機能認知に基づく死別後の適応・不適応家族の検討, 心身医学, 39(7), 525 - 532.
- ・Staudacher,Carol(1991):Men &Grief,New Harbinger Publications,11-41,99-119.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 坂口美和, 佐々木裕子
2. 発表標題 妻を亡くした中年期男性の強みー「家族を守る」役割に焦点を当ててー
3. 学会等名 日本家族看護学会 第26回学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐々木 裕子 (Sasaki Yuko) (10351149)	愛知医科大学・看護学部・准教授 (33920)	